〔本朝文鑑四書狀〕酒盛移文　橘佐渡入道

さて後陣には鬼七兵衞、その名も高田の上戸にえらばれて、旗には水村山郭の四字を、城南の風に吹なびかせ、今日の福王寺を目にかけて、風乙皎雪にわたりあふ、夕陽すでに貝鐘○鐘誤蓋にかがやきて、池をめぐり岡をへだつるに、そなたはむさし野、うき島が原、こなたは熊谷、織部など名乘かけてさしちがふる、○略下

〔雅筵醉狂集四冬〕水仙花

水仙や空よりくだる白露をうけてさゝぐる玉のさかづき

水仙花可盞ベクサカヅキ

盃の底に、細き穴をあけ、指を以て其穴をふさぎて酒を盛しむ、仍て飲盡さねば、下に置れぬ也、可の字は、文章の上に有て、下に置ざる字ゆへ、俗にべく盃と名づけ用ゆ、

〔元祿曾我物語二〕輕口もいひ盡しては物がない

草庵に集ひ居て、氣儘の醉興可盃の後は各氣强くなりて、○略下

〔雅筵醉狂集一春〕梅雪

梅と雪詩をもつくらず酒くみてさかづきのみの十分の春

十分盃といふもの有

〔本朝櫻陰比事一〕命は九分目の酒

むかし都の寺町通りに、十分盃を和朝に玄はじめて、工夫の細工人有、唐土の偃師が、繰にも劣るまじきものといへり、

〔元祿曾我物語三〕一節に昔を忍ぶ旅姿

床過ての亂れ酒、遊船繪に白漆の玉子盃、○略下